第二部討論

司会　關秉寅
台湾国立政治大学教授

關秉寅氏

【關秉寅】 金森先生、ありがとうございました。

先生の論文を拝読しまして、このお話は、竹内先生がマクロ的観点からお話しくださった内容に対応するものであるという印象を受けました。

【フロア】 私は外国人ですから、日本の作家である宮沢賢治に対してあまり理解がないのですが、そのような立場から一つ質問させていただきたいと思います。

まず一つは、宮沢賢治の文学史における位置、もしくは重要性というようなものがどのようなものであるのかということです。

そしてもう一つは、金森先生はなぜ宮沢賢治を題材とし、その死生観というものを論じようと思われたのか、宮沢賢治の死生観の特殊性というものはどこにあるのか。そういったことをお伺いしたいと思います。

【闇】 先に二つ目の質問を受け付けてから、まとめて金森先生にお答えいただきたいと思います。

【フロア】 生と死というのは、一つの苦しみ、じたばたする過程です。先生はイスラム教の礼拝というものに触れられましたけれども、その礼拝というものはある種、自分に対し、そして相手に対しても死んだということを教えるものでもあります。そのような過程を通ったあとで、はじめて豚を使用していいということになるのでしょうか。こういう理解は正しいと思われますか。

【金森修】 まず、二つ目の質問から。

イスラム教の礼拝の話と、豚の話とでは、直接は違う話ですので、直接の関係はありません。今、ざっと考えているところなんですが、賢治の童話の中で、礼拝とか儀式とかいうものを主題にした作品は、おそらくはないのではないのかと思います。ただ、みなさん宗教へのご関心は高いと思いますので、念のために言っておきますと、たとえば極楽世界のようなところにお釈迦様が幻想的に出てくるような話もありますし、先ほどから何回も触れている「銀河鉄道の夜」も、きわめて宗教的なテーマ――祈りや命のいとなみというようなものと、銀河といういわば鉱物的な世界とをミックスさせているところがあります。そしてそのような点が、賢治の特徴なのではないかと思います。

次に最初の質問にお答えします。最初に言わなくてはいけないのが文学史における賢治の位置なのですが、

正確なことを言うには、私はあまりに素人すぎますので、これに関してはなるべく言わないほうがいいのではないかと思います。ただ、私の個人的印象としては、近代詩、明治以降の詩の世界の中で、比較的早い時期に、詩的な言語として、たとえば「水銀」や「電灯」といったような、技術的・地質学的な、つまり科学用語を多用するというようなことは、――そこには彼の知的背景が関係しているわけですが――、普通の叙情詩的な、たとえば島崎藤村などの詩などになじんでいる人にとっては、表現可能性を一挙に拡大したものとして映ったのではないかと思います。

それから、なぜ賢治を使って死生観を論じようとしたのかということについてですが、竹内先生も同じだと思うのですが、こういう生と死の話に関して、一般的な原理とか、あるいは、宗教的な最終的な一番大事な学説とかは、どの文化、どの宗教でも大枠の意味というのはそれほど変わらない。我々人間存在の基本的事実なので変わらないわけです。だからこそ、そういう大枠の原理原則ではなくて、細かい繊細な表現形態にこだわる必要があると思っているのです。その観点からみるなら、文学作品というのは、きわめてすぐれた例証になる。賢治を使ったのもその考え方があったから、つまり原理原則の抽象的な反復をするだけで満足することは避けたいという気持ちがあったからです。